

笑い

西をさむ

ロバート・プルチックに依ると、脳には歓喜、愛慕、恐怖、驚愕、悲嘆、
嫌忌、激怒、驚戒の八つの純粹情報が存在すると言う。

なんと激しい言葉が並んで居るではないか。
此等の中に笑いなんて微塵も含まれて居ない。
あゝ悲しい。

悲しさの序でに、私は、私の笑って居る顔を見た事が無い。
可哀相と言われそうだが、皆も同じである。
己の顔は己で見る事が出来ないのだから。

鏡が有るじゃないかと言うが、百人中百人、自分の笑っている顔が鏡に
写った瞬間、笑うのを止め、目を逸らすだろう。
そう、笑いは悲しいのである。

おもしろうてやがてかなしき鶉舟哉 芭蕉

では笑いを誘うには如何すれば良いのだろう。
音楽は如何だろう、無理だ。
精々指揮者が指揮棒をぶっ飛ばす位だ。

造形は如何か、ピカソの絵が横目で睨んで居るけれど、此も無理。
此等二つは純粹情動を追い求め過ぎて居る。

八つの純粹情動をほぐすには如何すれば良いか。
これには二つ或いは三つ、又はすべてを融和してこそ、人は束縛から
柔軟にときほぐされ解放されるのである。これが救いである。
そこから笑いが生まれるのである。

花は、鳥は笑うだろうか。
人以外笑う筈が無い。
否、笑いますよと言う人が居るかも知れない。

この感情移入こそが純粹情動からの解放である。
さて、表情芸術は如何だろう。
此は頗る易しい。

能狂言から演劇、ミュージカルに至るまで、戯言と笑いを誘う仕草をすれば、
見て居る側の経験から、自ずと笑って呉れる。

もう一つ人間が最後に獲得した意志伝達の道具、言語だが、これが頗る勝れ物である。

子を思ふ雉子は涙のほろろかな 貞徳

この句は愛慕から出来て居るが、その中に言葉の綾を読み込み情けを軽くあしらい、
笑いを誘って居るではないか。

貞門の次は

抱籠や産まずに極る女竹 西鶴

め竹で出来て居るが抱籠を幾ら抱いても子供は出来ません。

こんな事をして居る私ほど、西鶴は苦笑するのです。

さすがですね。滑稽の天才かもしれません。

西行の慾のはじめやねはん像 蕪村

自分と西行を比べて、本当の自分の姿は如何なんだと、揶揄して居る蕪村が見えます。

さびしさに飯を食ふなり秋の風 一茶

食わなきゃ死んじゃいます。

でもまあ、飯が食えるだけでも増しか。

飛行機も鉄道もなかった時代に、何時追剥に会い、何所で野垂れ死にするかもしれない彼方此方旅をしたものだ。彼等も又、純粹情動を探し求めて居たのかもしれない。

これが人間としての可笑しさかもしれません。

次回は、大間違いの子規です。

・・・end